

BEST

Recyclers Alliance

NEWS

ベストリサイクリーズアライアンスニュース
中古・リビルトパーツのご提供で
お客様との夢をつなぐ情報誌

2015.10
Vol.148

第8回アジア自動車環境フォーラム秋田2015

日本・中国・韓国に豪州交えた環境会議 最先端の自リ法後のシステムを世界に発信



▲上は秋田キャッスルホテルで開かれた国際会議本会議と下は全出席者



▲熊本大外川教授



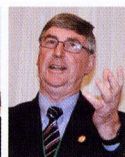
▲リサイクル協の清水氏



▲トヨタの丸山氏



▲韓国の朴氏



▲豪州のノーラン氏



▲マレーシアのグワイ氏



▲国際会議終了後の各国合意書



▲外川教授に感謝状贈呈



▲JARAの天明理事長と東北大劉教授

第8回アジア自動車環境フォーラム秋田がNPO法人・JARA(天明茂理事長)の主催で国内外の関係者総勢200人を招いて秋田市の秋田キャッスルホテルで開催された。工場見学を含め、会期は10月1日から3日の三日間に及び、とくに国際会議は日本の自動車リサイクル事情の海外に対する紹介を軸に、日本、中国、韓国にオーストラリア、マレーシア、モンゴルなど新興国を加えたアジア主要国の自動車についての環境問題を論じ合う有意義な討議が為された。

フォーラム会議はまず主催国である日本の自動車リサイクルの現状の発表から始まり、参加各国の報告が行われた。

◇日本の中古車輸出の急増に言及

冒頭、登壇した熊本大学法学部教授外川健一氏は「日本の自リ法は①不法投棄防止②使用済車輛のリサイクル適正処理③ASRの対応④既存業者の枠内で適正な経済競争が働くシステムの四つが基本だが、ASR対応については非常に効果が発揮された。その半面で法制化の結果、大量の異業種が参入し、とくに外国人の事業家が大量に日本のリサイクル業界に参画するという異常な一面も現れた。行政側ではおおむね順調に稼働していると言うが中古車の大量海外流失でリサイクル料金が輸出促進剤に変貌するという奇妙な結果となった」と

法制化の流れを報告、関心呼んだ。

続いて日本自動車リサイクル部品協議会会長清水信夫氏が日本でのリサイクル部品の活用実態を報告、「日本でのリサイクル部品流通は供給組織での教育、ネットワークによる在庫共有、宅急便による物流などで急速に発展を見ている。同時にリサイクル部品を活用することでCO2削減を微細に監視調整できる【見える化システム】が完成している。さらに機種にこだわらずあらゆる中古エンジンの始動が可能な始動機も開発されるなどリサイクル手法も近代化している」と解説した。

◇トヨタHVの廃品回収の現状に注目

三番目に登壇したトヨタ自動車技術統括部主幹丸山慎一氏が注目のハイブリッド車の資源循環について「トヨタ自動車ではほぼ全車種にわたってHV化が果たされた。今後はこれらの車輛廃棄について安全で適正なシステム造りが必要になる。HVリサイクル品の回収にあたっては①リビルト補給部品②定置用システムの適正処理③電池原料のリサイクルの三方向で総合的な適正処理の体制を整えて行く。とくに高純度ニッケルの回収については関係企業と連携して強化している」と現状報告を行い注目された。

この後、日本側から地元秋田に処理工場を持つDOWAメタルマイン(株)レアメタル事業部

部長西寿士氏がDOWAグループ、(株)日本ビージーエムリサイクル事業について、三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株)環境エネルギー部主任研究員清水孝太郎氏が自動車解体プロセスの改善によるリサイクルシステムの最適化についてそれぞれ講演した。

◇韓国、マレーシア、モンゴルも発表

日本側の発表に引き続いて海外からは韓国からオートリサイクリングセンターのJeong Howon氏が韓国におけるHFCs(フロンガス)再生及び精製について、同じくオートモービルリサイクリングエージェンシーのPark Kyung Mo氏が韓国における電気自動車の解体とリサイクルに向けた取り組みについて、オーストラリアから同国自動車リサイクル協会(APRAA)事務局長David Nolan氏が自動車リサイクルの新しい国際協力の必要性について、マレーシアからはマレーシア自動車リサイクル協会(MAARA)会長Gwee Bok Wee氏が同国での自動車リサイクル事情について、モンゴルからはモンゴル自動車リサイクル協会(MoARA)事務局長Choiil Baasandash氏がモンゴル・ウランバートル市における都市環境の新しい試みについてそれぞれ講演した。

講演後は各国代表が今回の秋田会議での総括を今後の会議に継承するための合意書にサインし、討議の継続を確認した。

解体後の廃タイヤ利用の近代農法を見学 開催地秋田の郷土色豊かな交流会で親睦深める



▲大晃商事DECOファームの温室栽培のトマトを見学



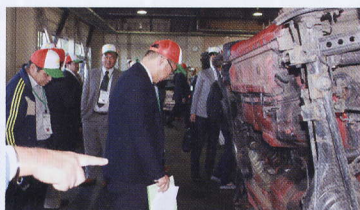
▲温室に蒸気を送り込む廃タイヤ利用のボイラーについて説明する担当者と土門社長



▲本社工場で開催されたランチョン(昼食会)



▲トヨタの燃料電池車MIRAIに見学者は驚いた



▲刈和野工場の解体コースを見学



◀二日目の夜の晩さん会は心から歓談の時を楽しんだ



▲秋田の名物・なまはげの太鼓フル演奏を観劇



▲上は地元秋田の綺麗どころ、下左は余興の手品、下右はホテルに設置された協賛企業のポスター展

第8回アジア自動車環境フォーラムは国際会議と現場の工場見学の二部構成で盛大に行われた。会期の初日は地元秋田の大手リサイクル事業者(株)大晃商事(土門五郎社長)の工場見学で、ここでは環境対策の一環として同社の別部門・農産物育成企業DECOファームの見学も行われ、自動車環境フォーラムの名にふさわしい企画となった。

◆トヨタの燃料電池車MIRAIに感激

大型バス二台に分乗した見学者はまず(株)大晃商事・アースクリーン刈和野工場に入り、同社の解体工程を見学後、続けて同本社に移動し、工場中央の展示場に展示されたトヨタの燃料電池車MIRAIに出迎えられ驚かされた。

海外からの見学者の中にはまじかにMIRAIを見るのははじめてという向きが多かっただけに衝撃あるパフォーマンスとなった。

その後に交流ランチョン(昼食会)がその場で持たれ、飲み放題の生ビールとともに秋田のご当地グルメが参加者に振る舞われ、歓談の時を持った。

食事の後、再び場所を移し、同社の大型農場であるDECOファームに向かい、自動車解体で

大量に発生する廃タイヤを燃料とした温室栽培のトマト、椎茸などの栽培状況を見学した。

◆解体後の廃タイヤ利用の新農法

同社が発生させる廃タイヤが燃料と言うことから、大幅なコスト削減が図れる寒冷地秋田の農業に貢献する農法というわけで、この動きは県当局からも大きい評価を受けている。

見学者は一様に温室用ボイラーの前で実際の作業上の手順を熱心に質問するなど強い関心を示していた。

二日目の夕刻には本会場となった秋田キャッスルホテルで豪華な晩さん会が催され、ここでは地元の佐竹敬久秋田県知事自らが歓迎の挨拶に立ち、郷土の趣向についてアピール、国際会議の雰囲気盛り上げていた。

晩さん会の冒頭、国際会議に対して送られた祝電披露が行われ、安倍総理、菅官房長官、岸田外務大臣、宮沢経産大臣、衛藤総理補佐官など政府高官の名前がずらりと並び異例の皮切りとなった。

続けて今回の大会実行委員長の東北大准教授劉庭秀氏から「大晃商事工場見学149人、工場ランチョン172人、国際会議166人、晩さ

ん会198人、DOWA見学59人のそれぞれ参加」が報告された。

その後に次の開催国オーストラリアのデビッド・ノーラン氏に対してNPO・JARA副理事長土門五郎氏から大会旗の手渡しが行われた。

◆秋田の郷土色濃い親睦の宴

晩さん会には地元秋田の綺麗どころが揃って秋田民謡や踊りを披露する一方、観光地秋田のアピールを兼ねて参加者には日本全国から50種の日本酒が特別コーナーで振る舞われた。

終盤には地元の名物、なまはげ太鼓が鬼の扮装をした演者によってフルコースの鉢さばきが披露され、全員がこれを観劇、最高潮を迎え、心ゆくまで親睦の思いを高めあった。

晩さん会の中締めを迎えて(株)JARAの北島宗尚社長が今回の国際会議実施に協力したスポンサーを全員紹介し、とくにその中核となった(株)大晃商事社長の土門五郎氏から受けた協力に対して謝意を真摯に表明、拍手の内に会を終えた。

最終の翌三日目は産業視察としてDOWAグループの地元小坂町の小坂製錬・日本ピージーエム社の見学とゴルフコンペが開催され、さらに親睦の効果を挙げていた。

ビッグウェーブグループ
尾崎 哲生 営業部長
有限会社田所商店
**三年連続最優秀フロント受賞
顧客の要望すべて引き受け**

 ▲地元の注文はなんでも揃う
田所商店の本小屋


▲尾崎哲生営業部長

創業が昭和54年、ビッグウェーブ入会が昭和61年の(有)田所商店(田所勝義社長)。総社員19人、月間解体200台、在庫点数11000点の規模。工場立地は住宅地にあり、扱いは顧客の要望に従ってなんでもありの営業姿勢だ。

◇超ベテランのフロントを配置

そんな同社のフロントを任されているのが今回のキーマン・尾崎哲生営業部長(37歳)である。同氏はグループの優秀フロントマン表彰一位を三年連続で受けた。さっそくその背景を聞くと次のような答えが返ってきた。

まず、彼の基本姿勢はじっくりと顧客の注文の背景を探ることから始める。「その部品はどのような状態でお使いになりますか」と最初の探りを入れる。部品名だけの情報ではなく十分にお客の気持ちを抱いて手配に入る。

そして商談の守備範囲は、国産普通車、輸入車、大型トラックとほぼ全域に広がりを持っている。つまりなんでも受けて売りに入る気迫だ。「売り先と仕入れ先とを時間をかけて作ってきたという自負はあります」という。

そのためには他府県に跨って積極的な人脈造りに動く。「多少遠くてもこれは面白いと思う同業者とは寸暇を割いて飲み会に出かけてわいわいやりま〜す」と笑う。

◇輸入車もオーナーになって情報収集

苦手だった輸入車もヤナセのパーツマンと友達になりたい思いでベンツを購入、情報入手の道を付けたというほどだ。「今度は私がヤナセのお客さんですから、親切にいろいろ教えてください」とトップセールスの一面を見せている。

分からないとお客にいうのが悔しくて、苦手を次々克服する姿勢、付き合う同業者をどんどん増やす姿勢、そして整備現場のお客がどんな気持ちで修理に臨んでいるか、時間をかけて情報を蓄積する姿勢に連続表彰の秘密があるようだ。「最近の車は直して永く乗るというふうには造られていません。新車の段階からノン・メンテナンスの時代に入っています。われわれのビジネスの方法も見直しの時では」と警鐘を鳴らしている。

職場 香川県高松市鬼無町藤井661
TEL087・881・2917

(株)JARA (ATRS)
都築 愛奈 さん
株式会社クローバーターボ
**創業2年目で新規に営業開始
リビルト・ターボのレディ目指す**


▲職場は大きいオフィスで電話とパソコンが武器



▲都築愛奈フロント担当

(株)HIとは以前の石川島播磨重工業(株)のこと。航空機から産業用重機械、巨大プラントなど多岐にわたる産業機械関連商品を国内外約250社の企業群で取り扱う文字通りのマンモス企業だ。そのグループに属する(株)クローバーターボ(佐藤亮一社長)は自動車アフターマーケットでの過給機の再生、修理、設計製造とその販売を行う。昨年4月に創業の新進企業である。

◇自動車用ターボに照準で営業開始

総社員は16人で主に取り扱うのは、軽自動車と商用トラック用のターボチャージャーで、普通乗用車用、小型船舶用、建設機械用も販売をしている。昨年末にJARAのATRS会員として加入し、リビルト部品扱いの分野で、今後、商圏を拡大して行く考えだ。

そんな同社のフロント業務を受け持つのが都築愛奈さん(23歳)だ。彼女は同社に今年4月に入社したばかりの新人だが、社内での基礎訓練はすでに済ませて、目下、単独でどんどん仕事をこなしている。

「ターボチャージャーは見えないところに装着されている部品ですが、実際は自動車だけではなくてあらゆる産業機械のエンジン補機として活用されています。(株)HI系の専門会社の視点から今後、精力的にリビルト・ターボを売っていきたいと思います」とハキハキ答える。

◇父のクルマ好きがきっかけで踏み込む

同社の本社は横浜市磯子区だが、実際の商品が生産されるのは大阪と神戸の工場、製品は埼玉と兵庫の倉庫からの出荷となる。

「全国の代理店さまとは電話とメールのやり取りで、部品番号による在庫の紹介が主な仕事ですが、このほかにも営業担当者の動きを社内でする仕事も結構あります」と多忙な日々を過ごしている。

彼女の父君は大のクルマ好きで幼いころから父の傍で自動車に親しみ、いっしょに整備工場などにも足を踏み入れた経験がある。いま、改めて本格的に自動車アフターマーケットと付き合うことになったわけだが、入社早々の働きぶりを見ると、このままのペースで研鑽すれば一人前のリビルト・ターボのフロントレディに成長するだろう。

職場 横浜市磯子区新中原町1番地
【商品に関する問い合わせ先】
TEL:06-4862-5571 FAX:06-6537-1174

(株)JARA (SPL)
高橋 建作 統括部長
株式会社高橋商会
**次期代表目指し目下特訓中
誰にでも分かる商談を模索**


▲地元一番店の風格十分の同社屋



▲高橋建作統括部長

北海道釧路の大手と言えばJARAグループの(株)高橋商会(高橋敏社長)である。1982年の創業で総社員36人、月間解体台数500台、平均在庫点数22000点の規模。軽四4割、普通車6割の扱い。部品以外にカーリース、レンタカー、タイヤ販売を別棟で営業展開している。リサイクル事業としては完成の段階にある。

◇二代目造りに取り組む同社

そんな同社の現場監督をいま勤めているのが二代目の高橋建作統括部長(32歳)だ。

学卒後、広告代理店に5年間勤務した後、高橋商会に帰って、まずカーリースを担当、その後には生産課長を経て、昨年1月の体制再編で統括部長の席に着いた。目下、二代目の修行に入っている。

いま、JARAグループの流れはほぼ全メンバーが次の時代に備えた若手経営者の訓練に入っており、同氏もその一人に挙げられる。

「お客さまからお声がかかる瞬間がビジネスチャンスそのもの。その【今】を絶対に生かして話を進めることをモットーにしています」と鋭い視点。つまりは一度受けた商談は逃がさないという。

学生時代はアメリカンフットボールで鳴らした体力戦と神経戦の感覚を仕事の現場で十分活用しているようだ。

◇先を読む力を早く身に付けたい

次の目標は正式に家業を継承することだが、これについては「父のこれまでの歩みを見て直観力とか行動力にはまだまだ及びません。いま学びたいことは、経営者としてどうすれば先を読み切る力を付けられるかという点です。ここの部分を早く父から学び込んでおきたい」と若者らしい意気込み。

いま同氏は日常の業務で一般の来店客にはできるだけ専門用語は使わずに女性や年配者でもすぐ分かる商談を心がけている。そういう努力の中からプロの世界に埋没していたリサイクル事業がゆっくり、一般社会の流通に昇格していくのを感じるという。

真の商人はまさに若き日に先を読む力を身に付ける必要がある。自身の置かれている立場を自覚している同氏を見て、釧路の高橋商会が名実ともに新しい歩みを始める日が近づいているのが分かる。

職場 北海道釧路郡釧路町若葉2の19
TEL0154・37・8456



【新トップインタビューシリーズ】

自動車リサイクルの現状打破に挑戦する経営者に聞くシリーズその19

日本の自動車リサイクル技術は世界標準 AAEFはアセアン諸国の加入を目指せ

千葉県 郷古 実氏(59歳)

「日本の高品質リサイクル部品は世界の注目の的だ」という郷古実氏 ▶



NPO法人JARAの常務理事であり、日本の自動車整備士養成のトップ校である日本自動車大学の教授を務める郷古実氏。世界の自動車リサイクル事業者団体と日本のNPO・JARAを結び窓口の役割を果たしてきた功績は極めて大きい。今回も秋田で開かれたアジア自動車環境フォーラムの裏方を務め、海外からのVIPの受け入れに尽力した。これからの日本の自動車リサイクル事業は広く世界の同業者に影響を与えて行くことは間違いない。世界的視野を持つ同氏の見解を聞いた。

まずあなたのこれまでの略歴と日本自動車大学の役割についてご説明ください。

郷古 わたしの父親が整備工場を経営していたため、子供の頃から修理の手伝いや下取り車の解体、部品の素材分別などを経験し、カスタムカーを含めて古今東西のクルマを触りました。クルマの技術の精巧さやモノ作りの面白さを知り、工業高校、整備学校と進学して2級整備士等の資格を取得しました。その後、横浜に移り住み、スズキのディーラーで検査主任者や自動車部品メーカーで開発実験の仕事に就きながら関東学院大学工学部機械工学科を卒業し、青年海外協力隊(JOCV)としてフランスで仏語を学んで北アフリカ、モロッコに赴任しました。現地の整備学校で青年たちに自動車整備を教え、さらに、アメリカへ語学留学し、国連ボランティア(UNV)として、内戦が激しかった南部アフリカ、モザンビーク(旧、ポルトガル領)に赴任し、整備技術指導や整備工場運営のスーパーバイザーとして4年間従事しました。その当時からモザンビークを含めて、アフリカ大陸での日本の自動車、特に日本製中古車の人気が高く、その耐久性はよく知られており、現地の国連職員たちも日本製中古車を愛用しているほどでした。わたしが担当していた整備工場に入庫したこれらの車両修理に必要な補修部品の入手に非常に苦労しました。現地の人々たちからの中古部品入手の要望も強いものがあり、日本からの中古部品の入手を何度か試みたことがあります。因みに、当時、私が最も欲しかったのは、日本国内ならどこでも入手できるポルトナット(その多くが特殊鋼で作られたJIS規格の細目ねじ)でした。長年の現地生活の中で、驚いたことは廃タイヤ利用のサンダル作りなどの徹底したリユースが行われる一方で、車体ガラの放置や不適正な廃油処理など矛盾した場面を幾度も目にし、わたしが自動車リサイクルを意識するきっかけにもなりました。帰国後は、自動車整備コースや自動車研究コース、カスタマイズコース、モータースポーツコースを設け、海外にも視野を向ける自動車産業の総合教育機関として知られる現在の日本自動車大学校(NATS)で教鞭を取ることにになり

ました。そこで今や20年が過ぎました。その間、執筆活動やJICA(国際協力機構)の海外研修生や協力隊候補生の技術研修、またJICA専門家としてモンゴルの公共交通整備計画やフィリピンの整備士教育、さらに現地調査や交通安全指導などにも関わってきました。今一番の関心事は、これまでの海外経験や人脈を生かして、NPO・JARAの役員として、また個人的にも自動車リサイクルという概念のない開発途上国に、日本のような素晴らしい自動車リサイクル産業を啓蒙する自動車リサイクル教育を根付かせることに貢献したいと思っています。

業界に関係する国際会議、IRTとAAEFの違いと、そのふたつの団体及び働きについて説明してください。

郷古 IRT(国際円卓会議)の趣旨は、自動車リサイクル事業者を主体にした自動車リサイクル事業者のための国際会議としての位置付けです。いわゆる「リサイクラーによる、リサイクラーのための国際会議」として、IRTは地域を限定せず、世界のあらゆる国からの参加を歓迎しています。一方、AAEFはアジア地域の自動車リサイクルや環境問題に関わるステークホルダーの会議として、自動車リサイクル事業者、政府行政関係、自動車メーカー、学識経験者などが幅広く関わったアジアの自動車環境会議だと思います。AAEFは調度、わたしが過去に2度参加した欧州11カ国の自動車リサイクル団体の総括団体、EGARA(欧州自動車リサイクル協会)の会議に近いと言えます。というわけで、IRTとAAEFどちらも、自動車リサイクル産業に関わる人々には意義のある働きを実際に行っていると思います。特に、AAEFには今後、アセアン各国からの参加を促す活動が必要と感じています。

世界のリサイクルパーツ事業者団体に対するNPO・JARAの役割と今後の方向性についてのお考えをお聞かせください。

郷古 現在、NPO・JARAは米国ARAやカナダARC、マレーシアMAARA、韓国KARA、中国AARTI、欧州EGARA、豪州ARAAなどの本部役員や会員企業、そして様々な国際会議に参加して交流のある業界関係者などと業界の関心事項や各種イベント情報など、インターネットを介して常に情報交換をしています。また、上記団体の関係者がNPO・JARA会員企業の視察や環境展などのイベントで来日の際には、業界の同僚・友人として役員一同心を込めてアテンドしています。NPO・JARAは、米国ARAや英国MVDAなど歴史ある団体に学ぶことも多く、特に米国ARAは活発な組織運営や業界のEラーニング(ARA大学)などの様々な啓発活動を積極的に行っており、その懐の深さと動きの速さは学ぶところが多いと思います。しかしながらわたしは、NPO・JARA会員企業は世界の自動車リサイクル

産業の中でもトップクラスに位置すると自負しており、自動車リサイクル事業の見本として誇りをもって海外へ紹介しています。これからは新興国・途上国にもNPO・JARAの会員企業について広く知ってもらえるよう日本の自動車リサイクルの啓蒙に奉仕して行きたいと思っています。2007年のIRT東京以来、IRT釧路やAAEF仙台、AAEF秋田に海外から多くの参加者があるのは日本の高品質なリサイクル部品生産プロセスなどが高く評価されている証だと思います。また、海外の事業者団体や政府が関心を寄せる日本の自動車リサイクル法について、正しく伝え、日本の自動車リサイクル制度を見本にした各国の自動車リサイクル制度制定の手助けにも役立てるように頑張りたいと思います。また、日本から毎年100万台以上の中古車が海外へ輸出されている現状から日本のリサイクルパーツを望む声は世界中で常にあり、これからは日本の優れたリサイクルパーツのコンピュータネットワークシステムやマルチ解体機なども紹介しながら、日本のような自動車リサイクル産業が必要になる新興国や途上国にどう貢献して行くかを模索することもNPO・JARAの重要な役割だと思います。グローバル商品である自動車の適正処理について、日本の政府や自動車メーカーと歩調を合わせて静脈産業側から循環型の自動車産業構築に貢献したいと思っています。

これからの世界市場におけるリサイクルパーツ流通についてどのようにお考えでしょうか。

郷古 世界市場におけるリサイクルパーツ流通についてですが、リサイクルパーツの流通はどの国でも国内流通が基本ですが、しかし、日本はオーストラリアやスペインの年間新車販売台数に匹敵する、年間100万台以上の中古車輸出の現状があり今後もこの状況は続くと思います。それだけに、現地では日本の中古車の存在意義があることを実証しています。加えて、将来は自動車先進国以外でも品質向上が著しい東アジアや東南アジアの新興国で生産された新車も、いづれは中古車として開発途上国に向けて輸出されることも予想されます。このような開発途上国の自動車修理・整備技術はメーカー系列の現地自動車ディーラーは技術力が総じて高いですが、整備修理は現地販売車のみの対応が一般的です。将来は、メーカー系列の現地自動車ディーラーが日本などからの中古自動車の整備に対応できるように日本のリサイクル部品を取り扱うことも考えられます。あるいは、現地で流通する車種やモデルは現地の行政が把握しているわけですから、環境負荷への低減に有効なリサイクル部品の流通に現地の有力な部品販売会社が現地の行政と情報共有するなどの方法で、リサイクル部品のネットワークを介して、日本からのオンデマンドのリサイクル部品供給が可能になる時代が来るかも知れません。

発行



株式会社 JARA

〒450-0002 東京都中央区日本橋1-2-2 親和ビル7階
TEL 03-3548-3010 責任者／古賀 信宏



株式会社 ビッグウェーブ

〒497-0005 愛知県あま市七宝町伊福鍛冶屋前58
TEL 052-441-7502 責任者／森川 信也